C－4 近世以降に於ける農民服飾の研究 ―染色に関する一考察―

和洋女大文家政 鷹司綸子

目的　藍は仕事着の染色を代表するものとされるが、これが良こばれるのは単に堅牢であるばかりでなく、洗濯によって増々色が冴えるからであった。しかし藍は建染で染料を醗酵させねばならないから、紺屋では地面にかめを埋めそれを火で暖めていわゆる「藍の気嫌をみる」のが大きな技術であった。その上容気建染で手早く均等に風が入らないとむらが出来る等染法がむつかしい。その為に早く専業化した仕事の一つであったのだが、出銭をきらう農村でどの程度紺屋を活用したのだろうか。或はこれに替る方法をとったのであろうか。その実態を求めるのが本研究の目的である。

方法　本研究室施行の生活調査・各地方誌・民俗誌を主な資料とした。

成果　近代染法以前の紺屋の利用は殊に東日本でその割に少く、やはり地染が良かったが、その技法は紺屋の様な人工加熱に依るものでなく、見くは、文字村の千葉あやのさんで注目された自然醗酵利用によるものであることが明かとなった。云いかえれば後藤捷一氏も示唆されたように人工加熱の方法はむしろ専業化した為に四季の需要に応じる為の創意工夫と考えられる。又一方藍より染法の容易な種々の草木、例えばくるみ、くり、きはだ、もも、くちなし、それにかなけ等の利用が絶に劣らぬ程良いことが判明した。